

幸福は「相互の利」から

上廣哲治

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災から、まもなく十年の年月がたとうとしています。震災は被災地のみならず、この国に暮らす多くの人々に衝撃と不安を与え、「幸福とは何か」という価値観にも大きな影響を及ぼしました。

一時期、人と人との「絆」の大切さがさかんに叫ばれたのも、価値観の変化のひとつの表れでしょう。実際、多くの人々が無償でボランティア活動や支援活動を行ったことは、暗雲のなかに差し込む一条の光となりました。一方、連帯意識の高まりとは裏腹に、相変わらず社会から疎外され、孤立した人が多数存在することも、問題視されるようになりました。人々が希望や幸福を感じられる社会を築くには、何を優先的に考え、どのように変えていかなければならないのか……。そうした問いかけから、この十年ほどの間に幸福感や幸福度についてのさまざまな調査・研究が行われるようになってきました。

たとえば震災の前年に内閣府に設けられた「幸福度に関する研究会」は、震災後の二〇一一年十二月、「幸福度指標」についての試案を発表しました。この試案では、幸福をもたらす要素として三つの指標を立てています。すなわち、仕事や住宅環境などを含む「経済社会状況」、心身両面の「健康」、家族や地域、自然とのつながりを中心とする「関係性」です。このほかに、環境問題とのかかわりから重視されるようになった「持続可能性」も、別立ての指標として定められています。

幸福度をめぐるこのような研究は、政府に限らず、大学や民間のシンクタンクなどでも進められてきました。一般財団法人日本総合研究所が二年に一度発表している「全47都道府県幸福度ランキング」もそのひとつで、経済面だけではなく、「健康」「文化」「仕事」「生活」「教育」についての分析をもとに幸福度を導き出しています。ちなみに昨年のトップは福井県、二位に富山県、四位に石川県が入っており、この北陸三県がいつも上位にあることが注目されています。

かつては、国内総生産（GDP）が幸福度をはかる指標とされてきましたが、右に挙げた研究に共通するのは、経済中心の考え方を見直し、生活の質や心の豊かさを重視しようとする姿勢です。経済的な安定は大切だけれど、必ずしも幸福感をもたらすわけではないという姿勢が示されているのです。

そのことを裏付けるように、日本は「裕福」であるにもかかわらず、幸福度が低いと言われつづけています。国連の「世界幸福度報告」によれば、最初の調査結果が出た二〇一二年の日本の幸福度は一五六か国中四位でしたが、順位は年々下がり、昨年は六二位にまで落ち込んでしまいました。

この調査は、それぞれの国民の主観的な幸福度を調べるとともに、一人あたりのGDP、社会保障制度などの社会的支援、健康寿命、人生における選択の自由度、他者への寛容さ、社会や国の腐敗に対する認識という六つの指標を加味して順位づけをしています。日本の場合、健康寿命やGDPは上位にあるものの、寛容さや自由度はかなり低く、それが順位の低下につながっているのです。

もちろん、「幸福」という主観的な問題を数字で比較することができるとかという疑問はあるでしょう。しかし、経済的な豊かさを追求することが、そのまま幸福感の増大につながるわけではないことは、謙虚かつ真剣に受けとめる必要があると思います。

日本を代表する哲学者のひとり、三木清が書いた『人生論ノート』という本があります。太平洋戦争前夜の一九四一年に出版されてベストセラーとなり、戦後の混乱期にふたたび人気を得て、今なお多くの人々に読み継がれている書物です。

この本に収められた「幸福について」の章は、いきなり「今日の人間は幸福について殆ど考えないようである」という文章で始まっています。そうなってしまう理由は何でしょう。「健全な胃をもっている者が胃の存在を感じないように、幸福である者は幸福について考えない」からなのでしょう。三木の考えは異なります。「むしろ我々の時代は人々に幸福について考える気力をさえ失わせてしまったほど不幸なのではあるまいか」と言うのです。

彼が言う「我々の時代」とは、戦時体制のもとで国民の権利が制限され、「滅私奉公」が求められる時代でした。そのような状況では、幸福を語る事がまるで「不道徳なこと」として捉えられることがあったのです。では、人々が幸福について真剣に考えてこなかったのは、戦時という特別な状況のせいなのでしょうか。どうやら、それだけではなさそうです。

三木は、幸福に対する関心がなくなった理由として、同書のなかで次のような指摘をしています。「成功するということが人々の主な問題となるようになったとき、幸福というものはや人々の深い関心でなくなつた」

「成功と幸福とを、不成功と不幸とを同一視するようになって以来、人間は真の幸福が何であるかを理解し得なくなつた。自分の不幸を不成功として考えている人間こそ、まことに憐れむべきである」

三木によれば、成功が「量」で考えうるものであるのに対し、幸福は「各人のもの、人格的な、性質的なもの」、つまり質的なものです。それらを混同して、何かに成功することが幸福であり、何かに失敗することが不幸であると考えてしまうことが問題だということです。

人と競って希望の学校に進学し、大企業に就職し、地位や高給を得て立派な家で暮らす——、それが幸福のあり方だと考えている人は案外多いのではないのでしょうか。しかし三木によれば、それらは幸福ではなく成功であり、量的であるがゆえにしばしば他者の嫉妬をとまなうものなのです。

東日本大震災を経て幸福度についての研究が進んだのは、既述のとおりです。しかし、成功と幸福を同一視し、経済的な豊かさや社会的地位の高さをもつて幸福の基準とする発想は、いまだ根深く残っています。人より優越することが幸福への道だという幻想にとりつかれ、こぞって自らの利益を追い求めていく。そうした姿勢が、人間関係にも大きなひずみをもたらしているように思えるのです。

社会的な存在である人間は、自分だけで幸福になることはできません。幸福は、しのぎを削る競争からではなく、「我も人もの仕合わせ」という「相互の利」を目指すことによつて生まれ、広がっていくものなのです。三木清は言います。「機嫌がよいこと、丁寧なこと、親切なこと、寛大なこと、等々、幸福はつねに外に現われる。……鳥の歌うが如くおのずから外に現われて他の人を幸福にするものが真の幸福である」と。このコロナ禍のなかで私たちがすべきことは、「不足の思い」を打ち払い、家族や周りの人々に向かって、機嫌よく、親切で、寛大な姿を示しつつづけることではないでしょうか。